

2025

10.1 (水)

12:10
12:50

12:10-12:15

◆発表者紹介

12:15-12:40

◆プレゼン

12:40-12:50

◆質疑応答

オンライン
(Zoom)

登録はこちら▶▶

https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN_z3AOT8QGThe3uUzmPZL1tg

【技術支援】九州大学 Q-AOS

弥生時代の人々に出会う：

総合研究博物館の古人骨資料を通して知る歴史



Key Words

古人骨

弥生時代

顔面部形質

米元 史織 准教授

九州大学総合研究博物館

東京都墨田区出身。東海大学文学部歴史学科卒業。2015年に九州大学大学院比較社会文化学府（現・地球社会統合科学府）博士後期課程単位修得退学後、九州大学総合研究博物館に支援教員として着任。2015年11月に博士号を取得（九州大学、博士（理学））した後、2018年1月に博物館の専任助教として着任しました（2024年10月から准教授）。専門は自然人類学で、筋骨格ストレスマーカー（Musculoskeletal stress markers）という方法を用いて筋付着部の発達から古代の人々の身体活動を再構築し、身体活動の差から格差がどのように展開したかを明らかにすることを目的として研究を行っています。2024年には、第14回日本考古学協会優秀論文賞を受賞しました。その他、総合研究博物館所蔵の3000体の古人骨を用いて頭蓋骨の3Dデータによる解析、弥生時代の形質の地域性の再検討を行い、弥生時代の成立と展開に関する研究を行っています。

私が所属する総合研究博物館には、遺跡から出土した約3000体の古人骨が所蔵されています。1953年に発掘・収集が始まって以来、これらの古人骨は日本列島に住む人々の起源をめぐる数多くの研究に用いられてきました。研究の結果、北部九州地域で弥生時代が成立する過程で、人々の顔かたちが縄文時代とは大きく変化したことが明らかになりました。高顔（面長）と呼ばれる、大陸から来た人々に由来すると考えられる形質が西日本に広がっていったのです。これらの変化は、大規模な置換ではなく、小規模かつ漸次的な変容として理解されています。膨大な資料を詳細に調べることで研究は着実に進展してきました。本セミナーでは、このような自然人類学の最新成果を通して、日本列島に暮らした人々の変遷をご紹介します。

2025

10.8 (水)

12:10
12:50

12:10-12:15

◆ 演者紹介

12:15-12:40

◆ プレゼン

12:40-12:50

◆ 質疑応答

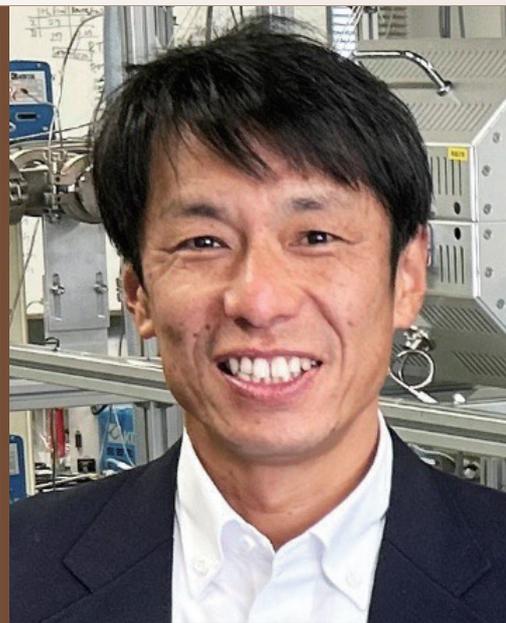
オンライン
(Zoom)

登録はこちら▶▶

https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN_D2s14HMmQTaqhyEYiuW9_Q

【技術支援】九州大学 Q-AOS

半導体の未来： 原子の薄いシートが次世代半導体を担う

7 エネルギーをみんなに
そしてクリーンに9 産業と技術革新の
基盤をつくろう17 パートナーシップで
目標を達成しよう

Key Words

次世代半導体

微細化限界の突破

半導体トレンド

原子層物質

2次元 / 2.5次元物質

吾郷 浩樹 主幹教授

九州大学総合理工学研究院 グローバルイノベーション部門

京都大学で博士号を取得後、日本学術振興会博士特別研究員に採用されてケンブリッジ大学キャベンディッシュ研究所で研究し、1999年からつくばにある産業技術総合研究所(旧通産省物質材料研究所)の研究員となりました。2003年から九州大学先導物質化学研究所、グローバルイノベーションセンターを経て2021年から主幹教授となっています。現在、総合理工学研究院に在籍し、半導体デバイスエコシステム研究教育センターの副センター長も兼務しています。これまで二次元物質やカーボンナノチューブなどのナノ材料の合成とエレクトロニクス応用に従事し、文部科学大臣表彰若手科学者賞や応用物理学会優秀論文賞などを受賞しました。現在は学術変革領域研究(A)「2.5次元物質科学」の領域代表や応用物理学会理事(機関誌編集委員長)なども務め、我が国の科学技術の活性化に貢献しています。

スマートフォンや自動車、さらにはChat GPTといったAI技術など、現在の私たちの生活は最先端の半導体に支えられています。同時に、我が国の経済安全保障においても半導体の重要性は増しています。半導体は主にシリコンから作られ、高速化、省エネルギー化を進めるため、微細化が日々推し進められています。しかし、デバイスサイズが、原子よりも一桁大きなナノメートルにまで到達し、微細化が限界に近づきつつあります。そこで注目されているのが、原子の厚みしかない究極的に薄い二次元物質です。本講演では半導体の現状から、二次元物質のデバイスの可能性や合成法、そして、複数の二次元物質からなる2.5次元物質の魅力についてお話します。

2025

10.15 (水) 12:15
12:55

12:15-12:20

◆発表者紹介

12:20-12:45

◆プレゼン

12:45-12:55

◆質疑応答

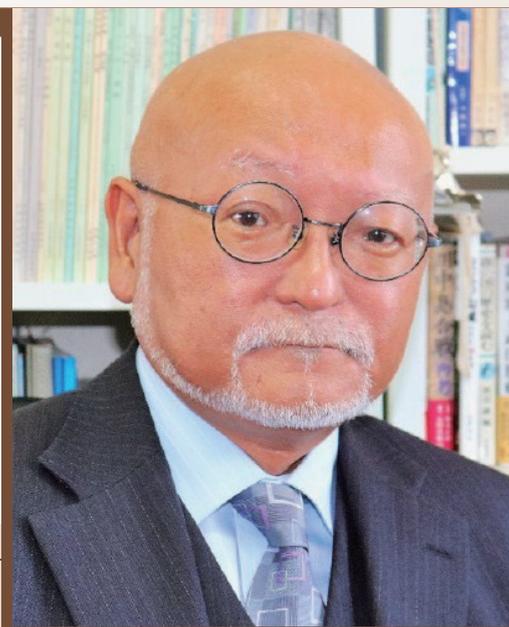
オンライン
(Zoom)

登録はこちら▶▶

https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN_sLHpqT1QQCqQa2RsMh1A

【技術支援】九州大学 Q-AOS

日本城郭の石垣の進化とその保存



Key Words

城

石垣

文化財

中世

近世

宮武 正登 教授

佐賀大学 地域学歴史文化研究センター



北海道北端の天塩町出身。國學院大學文学部史学科で中世史を学び、同大学院文学研究科日本史学専攻の修士課程を1988年に修了。在学中から城と城下町の研究を続け、文化庁の紹介により、豊臣秀吉の朝鮮出兵基地である名護屋城跡の保存整備と博物館開設のため、1990年に佐賀県教育庁に奉職しました。以後、名護屋城博物館学芸員や吉野ヶ里遺跡の調査保存担当などを務め、2014年から佐賀大学に転職し現在は地域学歴史文化研究センター教授を拝命しています。歴史学博士。代表著書は『肥前名護屋城の研究—中近世以降期の築城技法—』(吉川弘文館2020)。熊本城・名古屋城・和歌山城・島原城等の保存会議の委員を歴任しました。

日本の城の特徴的な構成要素である「石垣」の進化について解説し、その伝統的技法の継承という文化財保護の観点から、熊本城の震災復興を例に将来的課題を考えていきます。織田信長による安土城築城が契機となって、近畿の先進的築城法を地方に波及させていった豊臣秀吉は、肥前名護屋城で最先端の石垣構築技術を採用し、以後の城郭土木の発展の方向性を決定付けました。その過程で創出された熊本城ですが、2016年地震により多くの石垣が崩壊しました。その復元には構築当時の技法の忠実な再現が条件ですが、観光活用上の要請から現代工法による補強策の導入が検討され、歴史的遺産の保全の原則をめぐる議論が続いています。

2025

10.22 (水) 12:10
12:50

12:10-12:15

◆発表者紹介

12:15-12:40

◆プレゼン

12:40-12:50

◆質疑応答

オンライン
(Zoom)

登録はこちら▶▶

https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN_ydwrx04hTXKIJ9aUGClsvQ

【技術支援】九州大学 Q-AOS

初期地球 32 億年前の海底環境の復元； 海底熱水活動と鉄沈殿作用



Key Words

熱水活動

太古代

縞状鉄鉱層

黒色頁岩

清川 昌一 准教授

九州大学理学研究院 地球惑星科学部門

私は 1984 年に高知大学理学部に入学し、1987 年に卒業しました。その後、筑波大学大学院で修士課程を修了し、東京大学海洋研究所に進学して博士号を取得しました。博士論文では、西オーストラリア・ピルバラ地塊の太古代中期クリバービル層群の層序と構造発達を研究しました。日本学術振興会特別研究員を経て、アメリカ・コネチカット大学でポスドク研究を行い、その後、国立科学博物館特別研究員を務めました。2001 年から九州大学で教鞭をとり、現在は同大学准教授として活動しています。また、高知大学海洋コア総合研究センターや南アフリカ・ヨハネスブルグ大学でも客員教授を務めています。専門は野外地質学、太古代～原生代地質学、縞状鉄鉱層研究などで、2007 年には地質学会論文賞を受賞しました。

地球の歴史は、誕生から現在までを 4 つに区分できる。46～40 億年前を冥王代、40～25 億年前を太古代、25～5.4 億年前を原生代、5.4 億年前から現在を顕生代と呼ぶ。今回注目する太古代は、大陸が形成され始め、初期の生命が活動を始めた時代である。地球はマグマオーシャンから冷えながら海と大地を作り、その「冷えて固まる過程」こそが地球史といえる。太古代は火山活動や海底の熱水活動が盛んで、生物はこの環境に適応して生きていた。ここでは、西オーストラリア・ピルバラで復元された約 32 億年前の海底環境を紹介するとともに、太古代の海底を思わせる薩摩硫黄島の熱水活動と鉄沈殿作用についても紹介する。

2025

10.29 (水) 12:10
12:50

12:10-12:15

◆発表者紹介

12:15-12:40

◆プレゼン

12:40-12:50

◆質疑応答

オンライン
(Zoom)

登録はこちら▶▶

https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN_5tONqAzsTPyCVIR_NISMmw

【技術支援】九州大学 Q-AOS

個人の意思は社会が決める？ 社会システム理論から見た世界



Key Words



ニクラス・ルーマン

社会システム理論

個人の意思

鈴木 篤 准教授

九州大学人間環境学研究院教育学部門

大阪大学において人間科学を学んだ後、広島大学大学院において教育学の学問的研究に取り組みました。修士課程や博士課程においてはドイツの教育学や教育哲学を専門とし、ドイツのベルリン・フンボルト大学とチュービンゲン大学にも研究滞在をしています。教育学に関する博士号を取得した後、兵庫教育大学の助教、大分大学の准教授を経て、2021年から九州大学の人間環境学研究院ならびに教育学部で研究と教育に携わっています。社会学者ニクラス・ルーマンの社会システム理論を用いたシステム間関係の研究ならびに日本とドイツの教育学の歴史的発展過程の研究に取り組んでいます。

私たち人間はふだん、一人ひとりが独立して暮らし、自らの意思で自己決定していると考えています。しかし、実際には私たちは常に何らかのシステムとのつながりの中で暮らさざるをえず、それゆえ世界に何らかの意味を見いださざるをえない存在でもあります。私たちの意思決定は、実は社会に存在する様々なシステムによって生み出されているものでもあるのです。

本日のセミナーでは、ドイツ人社会学者 N. ルーマンの社会システム理論を手がかりに、私たちが社会の各システムからいかなる影響を受けているのか、その上で、どのように意思決定をしているのか、考えてみたいと思います。